

Loop、創業者の中村創一郎氏が代表取締役社長に復帰 再エネ保有を10倍の100万kWに拡大へ

「エネルギーフリー社会の実現」を掲げ、再生可能エネルギー発電所の開発や小売電気事業「Loopでんき」を展開するLoop。2023年3月に退任会見を行い、会長職として長期的視点での共創パートナーを探すべく海外に出発した創業者の中村創一郎氏が、改めてこのほど同社の代表取締役社長CEOに就任した。復帰の理由や2年間の活動、その間のLoopの活動の評価、足元の事業環境などを聞いた。

ー2023年3月に退任会見をされてから約2年、当時お話しされた内容からは、かなり早く戻られた印象をうける
中村 出発当時は5年以上海外を見て回るつもりだった。いくつか理由がある。まずは海外各国を回る中で、日本がもはやエネルギー先進国と呼べる状況にないと実感したこと。加えて、東急不動産から4月に出資いただいた際、「日本のエネルギー転換を一緒にやろう」と強く誘われたこと。最後に父が体調悪化した際、「海外を見るのもいいが日本をちゃんとやれ。後を託すから」といわれたこと。2024年11月の段階では帰国を決断していなかったが、今の日本の現状や、帰国して何ができるのか、自分なりにシミュレーションした際、まだまだ日本でやれることが沢山あるなど気づいた。

ー海外を回られて気づいたことやビジネスチャンスについて

中村 興味があるのはキルギスでの小水力発電事業。非常に発電コストが安く、電力多消費産業、例えばアルミ製造企業を日本からキルギスに移転すれば、日本の消費エネルギー削減に貢献しつつ、移転した企業も低コストで再エネ電力を活用できる。ビットコインのマイニングも有望で、我々としても現地通貨の信認に左右されず電源開発できる。一時は電気代の安さからマイニング需要が殺到し、電力不足から規制されていたが、電源開発が進んだことで緩和に向かいつつある。

ケニアでは、日本でFIT終了後に大量発生するとみられる、中古の太陽光パネルの需要がありそうだ。国内事業者か

ら得たパネル処分費用を原資にすれば、無償での供給もできるのではないかな。

このほかインドのバンガロールでは再エネで電動トゥクトゥク(三輪バイク)を動かす企業から話を聞いた。また、バングラデシュではLoopのIT機能強化に向け、外注できる企業を探したり、オフグリッドで電力販売する企業への出資も検討している。

ー2年間Loopの社長を務めた、森田卓巳取締役の実績をどう評価しているか

中村 社長退任後も月2回ほど、ファウンダーとして1対1でやり取りしていた。森田さんは電力販売の安定化、黒字化など、着実に販売安定化を達成してくれた。経営陣や社員の努力には非常に感謝している。

一方で、後出しでフェアでないことを承知でいえば、「着実すぎた」。新しい取り組みやビジネスをスケールさせていくものが不足していた。今後はオーナーである僕でなければ取れないようなリスクを取る。具体的には赤字予算やM&Aの早期意思決定など様々な手段を検討していく。

ー第7次エネルギー基本計画が策定された

中村 非常に高い再エネ比率が示されたが、実効策との整合性がちぐはぐな印象だ。再エネを主力電源とすると明記していたり、自家消費型へのシフトであつたりとか洋上風力発電の推進と書いているにも関わらず、ではそれを本当に政府として支援しようとしているのかということ、かなり疑問が残る。



中村創一郎氏

大手企業を優遇するような印象も受ける。我々が再エネを広めるために発電所を購入しようとする住民説明会が求められる。一方で上場企業は長期安定適格太陽光発電事業者制度の活用によって説明会が免除される。非常にアンフェアな政策だと思っている。また、原子力発電も推進する方向性だが、供給過剰にならないのか疑問はある。こうした認識をプレーヤーとして外部に発信していく。

ただ、我々もできることはやっていくつもりだ。固定価格買取制度(FIT)満了の発電所を集めてリパワリングしたり、蓄電池事業、バーチャルパワープラント(VPP)やデマンドレスポンス(DR)なども含め日本の再エネ拡大に貢献していく。

ー保有する再エネ電源を10万kWから100万kWに引き上げる目標を掲げた。どのように行うか

中村 既存の太陽光発電所がFIT満了を迎えると放置されるおそれもあるので、これを引き受けてリパワリングしたい。発電所への蓄電池併設も進め、24時間再エネ供給できる体制を実現

したい。発電所への併設は義務だと考えている。

新規開発も行っているが、再エネを購入したい需要家がいるエリアを見極める必要がある。まずは既存の発電所を集約していくことが優先。FITが切れると電力販売先を見つけたり、その収益からメンテナンス費用を捻出しなければならない。パネル廃棄まで義務化されると、オーナーにとって不良資産になる。

ー売り先は再エネ電力を求める企業になるか

中村 再エネだから高く買うというニーズはあまり多くない。まずはLooopでんきの電源として一般の人につかってもらいたい。

ー2024年に北海道で風力発電を稼働したが、風力開発の展望は

中村 良い事業地があればやりたいが、リスクも高い。同じ価格なら太陽光のリパワリングを進める方が社会的意義が高いのではないかと。我々の優位性を生かすのも難しい。

ー埼玉県で自社初の系統用蓄電池が完成した

中村 系統用蓄電池事業は今後も強化していく。日中の余剰電力を有効活

用する、発電＋蓄電の開発体制を構築し、供給力の安定確保を進める。三菱電機とHD Renewable Energyの合併会社でアグリゲーション事業を手掛ける「HeLM Aggregation」にも5月に参画した。

ただ、個人的には再エネ併設とは逆に、系統用蓄電池事業を民間でやるべきか、根本的には疑問もある。大手電力会社が持った方が社会システム的には効率的でないか。

また、政府は補助金要件などで国産利用を志向するが、割高になる。太陽光発電も中国の膨大な資源を利用できたことで価格を下げられた。もし国産を推進するのなら、日本の基幹産業にするんだという覚悟を持つべきだ。産業を育てて将来的に海外に輸出できるような長期目線がないのならやるべきではない。

ーLooopはデマンドレスポンス普及に力を入れている。海外では進んでいたか

中村 海外を見てきたが、エネルギーマネジメントシステムの導入は進んでいるが、ネガティブプライスもあり、DRというより自動で合理化する方向性だった。

世界的には、行動変容型でのDR実現は中々難しいのではないかと。しかし、ごみの分別をしっかりと行うような

日本の国民性であれば、行動変容型も実現できると思う。電気代がしっかり削減できることを示せば、異業種も含め自動化にチャレンジするプレイヤーも増えるのではないかと。

ただ、家庭を例に挙げると、既に沢山の家電が導入された後で、それらを自動制御するシステムを導入するのは、異なるメーカーの機器間連携などが本質的に難しいと思う。Looopがスマートホーム事業に参入するのも、最初はスマートキーレベルからかもしれないが、最終的には新築住宅からエネルギーマネジメントシステムを前提にした設備設計を行いたいという意図がある。

ーLooopをどうしていくか

中村 楽しい電力会社を作りたい。わくわくする体験、皆でピークシフトに参加して電気代が下がっていくような、新しい経験を提供したい。

僕たちは会社としてエネルギーの未来を良くしていこうと思っている。それは若い子供たちのためにやること。これは事業というより僕自身が世界を見て感じたことだが、日本の人たちは閉塞感の中で苦しい状況に陥っていると考えているかもしれないが、そうではないんだ、もっと自由だし明るい未来があるんだぞってことを何らかの形で示せば。

Looop、2028年に売上高1,000億円目指す／中村社長 事業戦略説明会を開催

Looopは2025年7月17日、事業戦略説明会を開催した。主なスピーカーは、6月末に代表取締役社長CEOとなった創業者の中村創一郎氏。新電力事業では現在の顧客34万件から、2028年に100万件まで拡大。売上高1,000億円、売上総利益約223億円を達成して上場する方向性を示した。

Looopはエネルギーフリー社会実現に向け、3つの方向性を掲げる。一つは再生可能エネルギー電源と系統用蓄電池の開発。再エネ電源は現在10万kW程度を保有しているが、「早期に100万kW」(中村社長)への拡大を目指す。新規開発だけでなく、稼働済み案件を取得、適宜リパワリングすることで保有量を拡大していく。系統用蓄電池は国の政策動向などを踏まえて順次開発していく。

小売電気事業では、顧客体験のアップデートとスマートホーム事業参入に注力する。市場連動型の「Looopで

んき」は太陽光発電の発電が期待できる晴れの日の日中に価格が安くなる傾向にある。こうした情報はスマートフォンアプリを通じて確認できるが、今後は家電などと連携して、AIが自動でエネルギー利用を最適化できるような仕組みを組み込むことを目指す。中村社長は「エネルギーマネジメントシステムや電気自動車との連携、太陽光発電の自家消費などを通じて、Looopならではのスマートなエネルギー体験を届けていきたい」と語った。

3つ目はデジタルプラットフォームの構築とシステム基盤の強化。AIなどの最新技術を導入し、エネルギーテック企業としての変革を目指す。3年間で50人を増員するほか、様々な国籍の人材を雇用してシステムの内製化を目指す。これに向け、デジタルソリューション本部長に、ユニクロのRFIDシステム開発などの経験を持つタクルダールロニー氏を迎えた。